

フランス・バスクの即興歌術の研究: 現在の演奏と1世紀前の演奏の比較を中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2021-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 姫田, 大, Himeda, Dai メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/1938

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



フランス・バスクの即興歌術の研究

現在の演奏と1世紀前の演奏の比較を中心に

Etude de l'art du chant improvisé au Pays basque français
Comparaison entre l'exécution contemporaine et celle du début du 20ème siècle

姫 田 大

Dai Himeda

0 はじめに

バスクはフランスとスペインにまたがる地域であるが、本研究では、フランス側バスクの伝統的な即興歌術ベルチョラリツァ (bertsularitza) を扱う。これはバスク民族の音楽・文芸の中心的な存在で、基本的には他者から与えられた歌詞の主題と歌の形式を元に、その場で脚韻を踏み詩的・音楽的なテキストを即興で生成していく過程である。この技法の変遷を調べるためには、古い時代の録音が不可欠である。トーマス・エディソン (Thomas Edison 1847-1931) が録音技術を発明したのは19世紀であるが、これはバスクでは使われなかった。しかし、今から一世紀前の第一次世界大戦にフランス兵として参加したバスク人がドイツで捕虜になり、その際 (1916-17年) に録音された資料が最近になって見つかった。これは、ベルリン大学で比較音楽学を推進し、諸民族の音楽の録音を行っていたカール・シュトゥンプ (Carl Stumpf 1848-1936) が中心になって録音したものである。後述するが、この録音は「プロイセン帝室録音委員会 Preußische Phonographischen Kommission 1915-1918」によるものであり、この組織を以下にプロイセン委員会と略称する。そこに収められた歌と比較する資料としては、フランス側バスク・スベロア地方の文化協会スアシア (Sü Azia) が1980年代から収録した録音を使用する (fonds "collectage archivage transmission": Sü Azia)。これらの歌を比較検討することによって、即興技法における固定した部分と変化する部分を明らかにする。

論文の構成は、次の4つの部分に分かれる。第一に、スベロア地方を中心としたフランス側バスク地方の歌を研究する必要性と意義を論じること、第二に当該地域による最も古い録音資料 (1916-1917) の成立を、比較音楽学と録音技術との関係により論じること、第三に、比較対象として、現在の当該地域の録音記録資料体について検討し、両者の比較を行うこと。第四にこれらの分析を通して、本稿の目的である即興技法における固定した部分と変化する部分を明らかにする。

1 バスク民族とフランス側バスク地方の歌を研究する意義

1.1 バスク民族の地理および言語的特徴

バスク民族はユーラシア大陸の西端、イベリア半島北部、ピレネー山脈西端にフランス側とスペイン側に分かれた7つの領域に居住している。フランス側はアキテーヌ地域圏ピレネー・アトランティック県の一部にあり、伝統的な区分ではラプルディ地方、低ナファロア地方、スベロア地方の3つの地域に当たる。スペイン側には現在の行政単位であるバスク自治州（アラバ県、ピスカイヤ県、ギプスコア県）とナファロア県がある。両国を合わせると、広さはおよそ2万平方キロメートルに約300万人が暮らす。2016年に行われたバスク語話者数の調査では、フランス側ラプルディ地方のバスク語話者数は人口の23%、低ナファロア地方およびスベロア地方のバスク語話者数は49.5%であり、低ナファロア地方とスベロア地方のバスク語話者が人口に占める割合は高い比率を示している¹。

この地域は旧石器時代中期（約15万年前）から人類の痕跡が確認できるが、現バスク人の祖先と想定される人骨の断片は、マドレーヌ文化後期（1万2000～1万4000年前）の地層から発見されている。バスク語は、この地域で話されていた言葉と考えられ、周辺の大きな言語であるフランス語やスペイン語を含め、世界のどの言語とも親縁関係が見られず、系統的には孤立している。表記はラテン文字を借用し、語彙の借用は多く見られる²。バスクは西ヨーロッパでキリスト教化が最も遅かった地方（11世紀頃）であるが、16世紀に聖書のバスク語全訳が行われ、以降、ラテン文字によるバスク語の文字表記が広まり、バスク人自らが書記性による記録をもつようになった。この狭い地域に9つのバスク語方言がある³。統一した国家を持ったことのないバスク民族は、1960年代に「バスク語アカデミー」による標準バスク語（euskara batua）を制定した⁴。

1.2 バスク地方の最も古い伝承歌曲がスベロア地方に存在すること

口頭伝承による即興歌術ベルチョラリツァの最も古く、そして現在まで伝承されている歌は、15世紀に実際に起こった事件を歌った15世紀の「ベルテレチュの歌（Berterretxen Kanthoria）」である⁵。他に、音楽におけるこの地域の古い証拠として、先史時代の洞窟遺跡から出土する笛⁶を祖先に持つと言われる片手で吹き3つの穴を操作するチストゥ（txistu）、中世に西ヨーロッパで使われ現在でもバスク地方で使われているプサルテリオンのようなソイニュ（soinu）⁷、珍しい奏法の打楽器チャラパルタ⁸、スベロア地方のみに残る中世の聖史劇の伝統を受け継ぐ野外民衆劇「パストラル」⁹など豊富な例を見ることが出来る。

1.3 19世紀にはじまる書記性によるバスク民謡の記録

バスク文化に重要な役割を持つ即興歌術ベルチョラリは口頭伝承による芸能で、バスク社会がキリスト教の導入まで書記性によるバスク語の記録を自ら行わなかったため、記録されることはなかった。前出の《ベルテレチュの歌》のように、多くは文字を読まない農夫や羊飼いが創作し、口頭伝承により、伝承されてきた。多くの伝承が、記録されなかった為に失われたと考えられる。そのような状況の中で、スベロア地方を中心に歌い継がれてきた歌を、体系的にはじめて「書記性」によって記録し残そう

とする動きが現れる。

1870年にスベロア地方モーレオンの弁護士ジャン・ドミニク・ジュリアン・サラベリ (Jean Dominique Julien Sallaberry 1837-1903) がはじめてスベロア地方を中心に50曲の民謡を収集し、旋律を楽譜化し、歌詞を文字で記録した¹⁰。

2 新しい技術「録音」による当該地域の記録について

ここまではバスク地方の地理、言語、文化的特徴と口頭伝承による歌の書記性による記録について述べた。次に、19世紀に現れた蠟管式録音機「フォノグラム」¹¹ や円盤式蓄音機「グラモフォン」¹² などに「音」を記録する新しい技術による当該地方の記録について述べたい。徳丸吉彦は文化の伝承について、直接、人から人へ、時間と場所を共有して伝承されることを「第一次口頭性」と呼び、同じ伝承でも、この時代に発明されたラジオや録音機など新しい技術により、時と場所を共有せずに伝承が行われることを「第二次口頭性」による伝承と定義している (徳丸 1990: 74-75)。本稿ではその考えに従い、以下に当該地域の歌に関する「第二次口頭性」による記録についてのべる。

2.1 最初の当該地域に関する録音資料体から現在まで

筆者が2019年と2020年にバスクにおいて存在を確認した録音資料は以下のものである。

1. 1900年にアズレイ (Léon Azoulay 1862-1926) がパリ人類学協会の調査結果をパリ万国博覧会で発表した当該地域の最初の録音資料 (パリ民族音楽学研究センター所蔵)¹³。
2. 1947年マルセル＝デュボア (Claudie Marcel-Debois 1913-1989) がピシヨネ＝アンドラル (Marie-Marguerite Pichonnet-Andral 1922-2004) と行ったフィールド・ワークで収集した約200曲の録音資料 (ヨーロッパ及び地中海文明博物館所蔵)¹⁴。
3. 1983-1990年に行われたプロジェクト《収集-保存-スベロア地方の歌の伝承 (Collectage-Archivage-Transmission du chant souletin)》の一環としてマルセル・ベダサガール (Marcel Bedaxagar) が収集した約400時間の録音資料¹⁵。

3.のプロジェクトの中心的な役割を果たしたのは、バイヨンヌ市近郊にあるバスク文化研究所 (Euskal Kultur Erakundea=EKE)¹⁶ であり、この研究所は成果を、展覧会の開催やラジオフランス・OcoraレーベルからのCD¹⁷ で公開している。かねてより、これらの成果に注目していた筆者は、2019年より数度にわたりEKEを訪れた。EKE所蔵の資料を調査する内に、この研究所が近年、研究・調査・広報など価値化に取り組んでいることを知った。質的量的には最初の体系的な歌の録音資料体と、言語学的フランス側バスク地方の録音資料体の存在を知らされ、それらを調査することを所長パンチョア・エチェゴワン (Pantxo Etchegoin 1960-) に薦められた。これらの資料は年代的には上記の資料体の1と2の間の1916-1917にかけて学問的、体系的に録音されたものがある。後述するように、新たに発見された資料体は、特殊な状況下に於いて録音されたと言え、質的量的および学問的に収集された、最初の貴重な録音体といえる。近年、それらが発見され、その整理・研究がEKEに託されていた

のである。

2.2 ドイツのプロイセン帝室録音委員会（本稿ではプロイセン委員会と略記）による

「バスク人戦争捕虜の録音（1916-1917）」

以下の情報はEKEがその成果をインターネット上に公開しているサイト「ミンツォアク (mintzoak)」¹⁸、および筆者がEKEにて、この調査・研究を担当した口頭伝承担当マイテ・デアール (Maite Deliart) のレクチャーによる。

発端は、ある日、ブルターニュの研究機関から所長に掛けてきた1本の電話による。「ベルリンからブルターニュに関する古い録音の問い合わせが来ている。バスクに関する録音もあるようだが、貴研究所は興味があるか」との内容だったようだ。最初は状況も分からないままに、ベルリンのフンボルト大学とベルリン民族学博物館をたずね、以降、2014年、2016年、2018年とEKEに録音資料体、書類などが到着するようになった。それらの理由は後述するが、100年の時を経て、それらの資料がバスクに到着した理由は、ドイツによって録音された資料体が第二次世界大戦の敗戦によって、資料が東側に持ち去られ、1989年の東西冷戦終結により、1990年からドイツ側による資料の保存、電子化、整理が行われ、順次、関係する民族にコンタクトを取り資料を提供したからである。

2.2.1 プロイセン委員会と第一次世界大戦ドイツ軍戦争捕虜

1914年第一次世界大戦がはじまる中、この委員会は1915年10月27日にドイツの言語学者ヴィルヘルム・デーゲン (Wilhelm Doegen 1877-1967) によって設立された。その前年に、「地上のすべての民族」の録音資料収集計画が、「諸民族の声」博物館設立を目的とし、プロイセン文化大臣の承認の元に立案され、当時の新しい録音技術であった「フォノグラフ」と「グラモフォン」の使用が決められた。

委員会は「ベルリン録音資料館」¹⁹ の設立者である音楽学・心理学の研究者カール・シュトゥンプの指導のもと、40人近い、著名なドイツの民族学、言語学、音楽学、人類学の学者が集まった。録音収集の目的は、諸民族の言語、歌を戦争捕虜となった人々から記録することであり、その人の生い立ち、受けた教育、職業、海外渡航経験、出征から捕虜になるまでの経緯の調査まで及んでおり、言語学的、人類学的、民族学的、音楽学的調査が行われた²⁰。

収集は、1915年から1918年まで、ドイツ軍戦争捕虜収容所250カ所の内、29カ所で行われた。収集に当たっては、協力の対価として待遇の改善を約束した。

言語学的、音楽学的資料収集として、「フォノグラフ」や「グラモフォン」の前に立って声を録音し、言語学者が「表音記号」に書き起こし、自ら文字を書ける収集対象者は自分の言語で収集内容を書き、所属する国の言語への翻訳を作成した。

収集された言語の数は250に及び、1650枚のグラモフォン盤が残され、バスク語に関してはデーゲンの指導の下、言語学者ヘルマン・ウルテル (Hermann Urtel 1873-1926) が、63枚のバスク語に関する言語的な資料を作成した。その内、少数のバスクの歌を含んでいる。また、1022管のフォノグラムによる録音が行われ、音楽学者ゲオルク・シューネマン (Georg Schünemann 1884-1945) により36管のバスクの歌の録音が、3つの収容所 (Chemnitz, Mannheim, Rottleberode) で行われた。

この委員会は1920年に解散し、資料は散らばったが、多くの部分が第二次世界大戦後、レニングラード、それから東ドイツに保管されていた。そしてドイツ統一後の1991年以降、フォノグラム（蠟管）型資料はベルリン民族学博物館に。グラモフォン（円盤）型資料はベルリンのフンボルト大学音声記録保管所（Lautarchiv）に保管された。

これらの記録は、2012年と2015年に「デジタル化」と「カタログ化」が行われ、2020年末にオープンする予定である新しい「ベルリン・フンボルト文化フォーラム・センター」に統合されるという。

2.2.2 「バスク人戦争捕虜の録音（1916-1917）」

この資料に録音を残したバスク人戦争捕虜は、フランス側バスク地方からの10人である。スペイン側バスク地方の録音は、スペインが第一次世界大戦に参戦していないため、存在しない。この録音に協力した人の中には、歌を歌うだけでなく、歌についての説明や、歌詞の朗読をした人も居るので、それらを縦軸の記述・朗読の欄に記すこととする²¹。

表1 バスク人戦争捕虜が記録した歌と記述・朗読

出身地方	演者	歌	記述・朗読
ラブルディ地方	Antoine Suhas (1885-1946)	39	12
	Jean-Baptiste Suhas (1884-1964)	15 ²²	
	Laurent Issuribehere (1895-1976)	2	2
	Pierre Labadie (1891-1918)	4	
	Jean-Baptiste Mendiburu (1889-1969)		2
低ナファロア地方	Jean-Noël Irigoyen (1895-1983)	1	4
	Pierre Mendiburu (1885-?)	1	
スベロア地方	Joseph Jaureguiber (1884-1956)	49	11
	Pierre Ascarateil (1895-?)	1	5
	Saint-Jean Bidegaray (1882-1952)	1	2

表1のように、バスク人戦争捕虜の録音は99媒体（109項目）に、フォノグラム（蠟管）36本に計1時間20分38秒が記録され、グラモフォン（円盤）63枚に2時間22秒が記録され、二つを合わせると3時間21分の録音になる。2人の演者がデュオで歌ったり、異なる演者が同じ歌を重複して歌った例を整理すると、記録されているのは歌が87曲、朗読が13個になる。

2.2.3 バスク人戦争捕虜録音資料体の公開状態について

EKEとベルリンの民族学博物館とフンボルト大学の取り決めにより、現時点では、資料体の公開状態が異なっている。フォノグラムのオリジナルを保管している民族学博物館は、すべての資料の公開を許可しているが、フンボルト大学は、個人情報保護の観点から、公開は部分的である²³。その考え方を踏まえ、EKEは「ミンツォアク」のサイト上に、できる限りの情報を公開し、利用できるようにしている。

3 現在の録音資料体 スペロア文化協会「スアシア (Sü Azia)」²⁴

スペロア地方の中心の町、モーレオン-リシャル (Mauléon-Licharre) にある「祖先の家 (Hondarearen Etxea)」に本拠を置くこの協会は、スペロア地方の文化の「収集・保管・伝承」を目的に1988年に設立され、会長はジャン・ミシェル・ベダサガール (Jean-Michel Bedaxagar 1953-) ²⁵ であり、現在、スペロア地方で屈指の人気を誇る即興歌人である。氏の実弟マルセル・ベダサガール (Marcel Bedaxagar 1955-) はバスク舞踏の名手でジャーナリストであり、前述の録音資料体を作り上げた人である。その録音資料体は、推測であるが、現在、400時間を超えてさらに増加している。この協会の歌の収集は、前述の目的の通り、スペロア地方の芸能・文化の収集が目的とされており、さらに隣接するフランス側低ナファロア地方とラブルディ地方の歌も含まれている²⁶。2020年現在の分類項目数は、歌、楽器演奏、インタビューなどを合わせて登録されている人の数が130人、項目数は4432件である。

3.1 バスク人戦争捕虜録音資料体と「スアシア」協会録音所有資料体の比較

このプロイセン委員会により録音されたバスク人戦争捕虜10人の録音のうち、言語的バスク語資料をのぞき、歌の比較に使用できる録音は、7人、87曲であるが、この曲数は、デュオで歌われたもの、つまり2人で同一録音を行い、それぞれの録音にカウントされたものと、同一の曲を複数の演者が歌った場合を除いた曲数である。

この全録音に対し、「スアシア」協会の録音資料体から、歌詞と旋律が合致した結果が以下の表2の通りである。

表2 録音されたバスク人戦争捕虜録音と「スアシア」協会録音資料体の比較

出身地方	演者	録音 (1916-1917)	「スアシア」録音資料体と 一致する歌
ラブルディ地方	Antoine Suhas (1885-1946)	39	11
	Jean-Baptiste Suhas (1884-1964)	15	8
	Laurent Issuribehere (1895-1976)	2	1
	Pierre Labadie (1891-1918)		
	Jean-Baptiste Mendiburu (1889-1969)		
低ナファロア地方	Jean-Noël Irigoyen (1895-1983)	1	1
	Pierre Mendiburu (1885-?)	1	
スペロア地方	Joseph Jaureguiber (1884-1956)	49	17
	Pierre Ascarateil (1895-?)	1	
	Saint-Jean Bidegaray (1882-1952)	1	1

上記の表2のように、100年前に記録された109曲のうち、39曲の歌を「スアシア」に記録されている歌、つまり同地域で「知られている」歌の同一の曲として認めることが出来る。勿論「スアシア」の録音の内、1曲しか同一の録音が見つからない場合もあれば、1曲に対し数十曲が同定される場合がある。今年2月、EKEのエチョゴワン所長も、「バスク人戦争捕虜の録音には、現在、我々の地方で知ら

れていない歌が含まれている。それが何を意味するのか知りたいと思う」と話していた。プロイセン委員会の記録には、8番までの歌詞が記録されているものも多く、当時の演者の「記憶の力」に感心する。出征し、激戦地で生き残り、捕虜となって収容された演者たちは、豊富に所持品を持ち歩けたとは思えないので、その歌詞は記憶の力に寄っていると考えられる。また「スアシア」協会の歌と比較し、歌詞がほぼ同じなので、正確に伝承されていると考えられる。

3.2 同一曲を3つの録音資料により比較する 《タルデッツの城 (Atharratze jauregian)》

スベロア地方の町、タルデッツの城の2人の若き乙女を歌ったこの歌は、1870年に出版されたサラベリの本にも収録されている²⁷。内容は外国に乞われて嫁入りする乙女を惜しんで美しさをたたえている。この曲を3つの録音資料を基に楽譜化し、その差違を検討する²⁸。

- a. スベロア地方 J. ヨウレギベール、プロシア委員会録音 1917年9月30日録音²⁹
- b. スベロア地方 J.M. ベダサガールの「スアシア」收藏の録音³⁰
- c. スベロア地方野外民衆劇パストラルにおける村人の合唱、「スアシア」收藏の録音³¹

比較のため、いずれも最初の一節の歌詞部分を楽譜化した。ほぼ a. の歌詞に b. c. の譜例を対応させたレイアウトにしたが、3段目では a. と b. c. の歌詞の順序が入れ替わって異なっているので、その部分は、それぞれに歌詞を記入した。それを譜例1とする。a. b. はソロの男声、c. は混声合唱である。

- a. の歌唱の特徴は、リズムの取り方にこの地方独特のリズム「ソルツィコ (zortziko)」³²の特徴が見られる。
- b. の歌唱の特徴は、リズムにおいて1拍を偶数、奇数分割を正確に歌い分け、装飾としてポルタメントをかけることである。100年の時を隔て、a. と b.c. の歌では、3段目において、歌詞の語順が入れ替わり、それに対応した旋律が歌われている。現代では b.c. の歌唱で歌われているし、サラベリの1870年採譜の歌詞も同様である。
- c. において、この地方の特徴的な合唱の形が現れている。3度と6度の即興的な並進行が見られる³³。
 - すべての段落の終わりに於いて「脚韻」を踏んでいる。
 - 規則的な拍子の繰り返しは見られないが、フレーズの中で呼吸に合わせた(3+2)のような微妙な操作が見られる³⁴。また、呼吸に合わせた間を取る。

この曲では以上のような、特徴が見られるが、「音の高さ」に対する工夫は、ポルタメント以外には見られない。

a.
 A-thar - ra - tze jau - re - gi - an bi zi - troin do - ra tü

b.
 A-thar - ra - tze jau - re - gi - an bi zi - troin do - ra tü

c.
 A-thar - ra - tze jau - re - gi - an bi zi - troin do - ra tü

a.
 On-gri - a - ko Er - re - ge - k ba - tto dü gal - tha - tü

b.
 On-gri - a - ko Er - re - ge - k ba - tto dü gal - tha - tü

c.
 On-gri - a - ko Er - re - ge - k ba - tto dü gal - tha - tü

a.
 ü - khen dü Arra - pos - tü ez - ti - re - la hu - n - tü

b.
 A - r - ra - pos - tu ü - khen dü ez - tire - la hun - tü

c.
 A - r - ra - pos - tu ü - khen dü ez - tire - la hun - tü

a.
 Hun - tü di - re - ni - an bat - to ü - khe - nen dü

b.
 Hun - tü di - re - ni - an bat - to ü - khe - nen dü

c.
 Hun - tü di - re - ni - an bat - to ü - khe - nen dü

八

譜例1 《タルデッツの城》の2つの時代、3つの演奏形態による比較譜例 採譜：姫田大

3.3 同一曲を2つの録音資料により比較する 《花を見た (Lili bat ikusi dut)》

女性を花にたとえたこの歌を、プロイセン委員会の録音と、「スアシア」の所蔵録音で比較する。前者を a. とし、後者を b. とし、譜例 2 にこの歌の一番の歌詞部分を楽譜化する³⁵。

a. は理由は不明だが、1本の蠟管に3人が録音を行っている。ラプルディ地方出身のスアス兄弟が詩句を2つずつ交互に歌い、後に全編、歌い直している。次にスベロア地方のヨーレギベールが同じ歌を歌っている。四番まで歌詞は記録されているが、歌唱されたのは1番のみで、3人の演者で1本の蠟管に記録されていた³⁶。

b. の演者はジュネス・チュブル (Junes Chuburu) で、4番までの歌詞をすべて歌っている³⁷。

以下に比較の楽譜を譜例 2 とする。

a. li - li bat i - khu - si dut ba - ra - tze ba - te - an

b. li - li bat i - khu - si dut ba - ra - tze ba - te - an

a. de - si - ra - tzen bai - nu - en e - ne sa - he - xe - an

b. de - si - ra - tzen bai - nu - en e - ne sa - he - xe - an

a. lo - ri - a ez du gal - tze u - da - n, ez ne - gu - an

b. lo - ri - a ez du gal - tze u - da - n, ez ne - gu - an

a. ha - ren pa - re - rik ez da ber - tze bat mun - du - an

b. ha - ren pa - re - rik ez da ber - tze bat mun - du - an

九

□ 短いフェルマータ
 ◡ 少し長いフェルマータ

譜例 2 《花をみた》の2つの時代、2つの演奏形態による比較譜例 採譜：姫田大

a. と b. の演奏の間の顕著な相違は、b. の終止音 (Fa) から上へ3度 (La) と6度 (Re) の音が、a. に比べてそれぞれ半音低いことである。同一の歌詞を持ち、若干の装飾を別とすれば、リズム的には大きな相違が見られない中で、この2つの音の差は、顕著な違いである。スアシア所蔵録音の他の演奏を比較しても、同様な音程で歌っているのも、スベロア地方での歌い方と理解していいと考える。また、時折、この2つの a. と異なる音は、「微分音 (マイクロトーン)」的と呼びたいような変動を見せるので、筆者はこれを何らかの「美的な装飾」ではないかと推測する。

3.4 比較のまとめ

以上の二つの例の特徴をまとめると、次の点が言える。

- 100年という時を隔てて、現在確認できる歌は、ほぼ正確な伝承で、変化していない。
- 規則的な拍子の交代は見られず、歌の内部のリズムに「奇数+偶数」拍の組み合わせが見られる。
- 脚韻を踏んでいる。
- 合唱における3度、6度の即興的な並進行が見らる。
- スベロア地方の音の運用に、他地方との違いが見られる。

4 結語

フランス側バスク地方の音楽に関する録音資料体は、1900年にパリ万国博覧会において収集発表されたアズレイにより収集された未刊の録音資料体であるが、録音の数は少ない。音楽の研究にも使われはじめた録音技術は、蠟管や円盤に直接、空気の振動を刻んで記録する、当時としては画期的な技術であった。1916-17年プロイセン委員会によるバスク人戦争捕虜の録音は、そのきっかけが戦争によるものであったとしても、最初の規模の大きな、組織的、体系的な録音による言語的、音楽的、録音資料収集であったと考えられる。スアシア協会の録音資料体に集められている多様な録音を調べると、旧・パリ民衆伝統芸術博物館の電気式円盤レコード録音からオープンリールによる録音へ。M. ベダサガールが始めたソニー製 DAT を使った録音と、さながら録音の歴史をたどるようである。

現在、それらの資料体をバスクの人々は積極的にインターネット上に公開している。データベース化し、評価を行い、活用できるように整備している。バスク人戦争捕虜の録音資料体については2016年に2人のスペイン側モンドラゴン大学の学生が芸術家と協力し、バスク人戦争捕虜の手紙や手記を朗読し、インタビューを行うドキュメンタリー映画を作成した³⁸。この中で女流即興歌人マイデル・ベダサガールは次のように言っている。「ドイツの人が(歌の)保存の方法を知っていたことを評価します。100年前の録音がノイズの激しい物であったとしても、よく聞こえなくても、私たち(バスク人)が、あの録音を持っていたとしても、それを持ち続けることは出来たでしょうか?」。

3-1の項で明らかになったように、100年前の録音と、現在の伝承されている曲で、伝わっていない「歌」が、何故、消えたのかを調べることを今後の課題としたい。音楽的には興味深い「消えた」歌も、デーゲン、ウルテル、シューネマンらドイツの学者達の作成資料によって十分に研究可能である。

3-4の項でまとめたような特徴を、さらにスアシアの録音資料体を検討することによって抽出し、現

地でのインタビュー調査につなげたい。

ベルチョラリツァ（即興歌術）とは、他者から与えられた主題と形式により、その場で脚韻を踏み詩的・音楽的なテキストを即興で生成していく過程である。一定の詩型と音の運用規則によって、異なる詩的内容の音楽テキストを生成し続けていくことは、ベルチョラリツァ自身に変化し、新しい歌を生み出し続けることを示す。しかし一定の詩型と音の運用規則に従って即興しているとすれば、そこは変化しない部分である。そのプロセスを守ることがベルチョラリツァであると言える。今回の研究のように100年前と現在の録音を検討することは、ベルチョラリツァの結果を検討することであり、生成の過程・プロセスが判らない。プロセスを解明するためにはフィールド・ワークを行い、人々の意見を聞く必要がある。それを今後の研究の課題としたい。

注

- 1 この情報は公的バスク語オフィス（Euskararen Erakunde Publikoa/Office Public de la Langue Basque）の情報による。
<https://www.mintzaira.fr/fr/la-langue-basque/situation-socio-linguistique.html>（2020/08/19 にアクセス）
- 2 バスク語や文化・社会に関しては萩尾生 / 吉田浩美 編著『現代バスクを知るための50章』を参照されたい。
- 3 スペロア方言、サライツ方言、アエスコア方言、エロンカリ方言、ビスカイヤ方言、ギブスコア方言、ラブルディ方言、低ナファロア方言、高ナファロア方言、以上9つである。
- 4 バスク語アカデミー（Euskaltzaindia）
<https://www.euskaltzaindia.eus/>（2020/08/19 にアクセス）
- 5 スペロア地方の町、モーレオンの領主は、青年ベルテレチュエの恋人、美女アスペルドイに横恋慕し、青年を拉致し殺害し、アンドーセの谷に遺棄する。その事件に憤ったバスクの人々は、事実を歌にし、歌い継いだ。
- 6 紀元前1万年前の低ナファロア・イストゥリッツ（Isturitz）洞窟から2つ指孔が残る大鷲の骨製の笛が出土している（Etcheverry-Ainchart/Hurel 2013: 148）。
- 7 左手に縦に抱えるツイター型の撥弦楽器で、右手にバチを持って弦を叩き、5度音程のドローンを発生させる。奏者は左手に片手で吹奏するチストゥも持ち、ドローンを発生させながら笛を演奏する。彼らをチストゥラリ（txistulari）と呼ぶ。ソイニユを腕に吊った太鼓（atabal）に代えてチストゥを吹く場合もある。
- 8 一枚の板に2人の奏者がバチを持って複雑なリズムを演奏するが、バチは握るのではなく、バチを垂直に持って手を離し、板へ落下させ打音し、直ぐにすくい上げ、その動作をコントロールすることで複雑な響きとリズムを構成する。
- 9 パストラルに関しては拙稿（姫田 2018）を参照されたい。
- 10 このサラベリの記録は現在もバスクの人々のひもとく大事な拠り所、立ち返る資料になっているが、この当時の音楽に対する考え方、慣習から幾つか問題点が見られる。一つは音程を1オクターブ12個の音に整理したこと、一つはバスクの歌を規則的な拍子の繰り返しで理解しようとしたこと、そして高尚な歌は伴奏があるべきである、という考えから機能和声によるピアノ伴奏譜をつけようとする試みが見られることである。
- 11 1877年にトーマス・エディソンによって実用化された円柱の蠟管に音を深さで刻み再生する装置。
- 12 1887年にエミール・ベルリナー（Emil Berliner 1851-1929）によって実用化された円盤に音を左右の動きで刻み再生する装置。
- 13 フォノグラムによってバスク語による5曲の歌、戦いの叫び声、3つの聖書朗読が記録されている。内訳は、ギブスコア地方の女性による2曲、スペロア地方の男性による2曲、3編の聖書福音詞章朗読で、それぞれの録音時間は3分以内である。1900年にアズレイは録音博物館設立の必要を強調している（Azoulay

1900)。

- 14 この資料の中にバスク地方の曲は66曲である。
- 15 この資料体の創設者 M. ベダサガールによると、1960年代から70年代にかけて、他の人が収集した当該地方の資料体(約100時間)を託され、彼自身がバスク舞踊の踊り手であり、ジャーナリストであった事から、組織的な収集のために、当時の新しい発明であった Sony 製録音機「DAT」を自ら購入し、300時間の録音を行った、と筆者は2020年2月に説明を受けた。
- 16 1990年設立の非営利団体。2020年に活動30周年を迎えるが、10人の専従スタッフが運営に当たっている。活動内容などは以下の URL を参照されたい。
<https://www.eke.eus/fr> (2020/08/22 にアクセス)
- 17 2枚組 CD Musiciens & Chanteurs Traditionnels Kantuketan / Basque Country Radio France, C560202/03. 3の録音収集作業の成果がこのCDによって聞くことが出来る。
- 18 ミントォアクは以下の URL を参照されたい。
<https://www.mintzoak.eus/fr/enregistrements/programmes/archives-de-la-commission-phonographique-prussienn/> (2020/08/22 にアクセス)
ここからフンボルト大学およびベルリン民族学博物館の該当する資料にリンクが張られており閲覧することが出来る。録音資料体は存在のみ。書類資料はオリジナルの写真版を見ることが出来る。
- 19 ベルリン録音資料館に関する記述としてはコッホ他2004がある。
- 20 録音資料には、その音韻表記、文字表記、所属する国の翻訳表記などが添付され、また演者のプロフィールは姓名、生年月日、身長、出身地、教育、職業、海外等旅行経験なども聴取され書類化された。
- 21 Pierre Labadie と Jean-Baptiste Mendiburu は無文字であり、二人とも、たとえ話「放蕩息子」を耳元で他者にささやいてもらい録音したと記録にある。
- 22 15曲のうち、5曲のバスク語による賛美歌を含む。
- 23 資料には生育の過程や受けた教育、出征の過程や戦闘、負傷などがあり、これらの個人情報やフンボルト大学はインターネットなどに公開すべきでないと考えた。しかしながら、直接 EKE に問い合わせて訪問すれば、すべての資料は視聴し閲覧できる。
- 24 バスク語で Sü (火) の Azi (種子) を表わす言葉。ホームページは以下の URL で閲覧でき、この組織が収集している録音資料体のすべてを、最初の1分間だけ視聴出来る。
<https://www.suazia.com/index.php?lang=fr> (2020/08/23 にアクセス)
この協会に関しては Laborde 1992 を参照。
- 25 この即興歌人に関しては拙稿(姫田 2018)で述べたように、J.M. ベダサガール氏はバストラルの題材を取材し、バスク語韻文による台本を作成し、主演した。詳細な情報を Bedaxagar 2018 に記している。
- 26 スペイン側のバスク民族の音楽資料は、バイヨヌ市からスペイン国境を越えた海沿いの都市サン・セバスチャン近郊エレスビルにある「バスク音楽アーカイブ (musikaren euskal artxiboa)」が詳しい。小さいながら、古い録音を再生する蓄音機や再生用ロール・ピアノまでスタジオに備え、バスク民族音楽、現代音楽、ポピュラー音楽の研究を支援している。
<https://www.eresbil.eus/> (2020/08/23 にアクセス)
- 27 <タルデッツの城 (Atharratze jauregian/Au Château de Tardets)> (翻訳: 姫田大)
この歌は7番まで歌詞があるが、1番をここに記す。
Atharratze jauregian bi zitroin doratù; タルデッツの城には二つの金のレモンがあった
Ongriako Erregek batto dü galthatù; ハンガリーの王がひとつくれと言った
Arrapostù ükhen dü eztirela huntù; まだ熟れていないから、
Huntù direnian batto ükhenen dü. 熟れたらひとつあげる、と言った。
J. D. J. Sallaberry J. D. J. サラベリ

Mauletarrak bildürrik

モウレオンで採譜

- 28 比較のために終止音を「レ」に統一した。a. の実音は譜面の半音上。速度は♩=108。b. の実音は譜面の2度下。速度は♩=99。c. の実音は譜面の4度下。速度は♩=96。
- 29 シューネマンによる録音 (VII W 0531 AK Schunemann Baskisch507), EKE 作成ミンツォアク上のリファレンス番号は BER-05-17。3 曲収録の蠟管の2曲目。
- 30 「スアシア」のリファレンス番号 (201BED-33)。
- 31 「スアシア」のリファレンス番号 (91BED-55)。
- 32 ソルツィコは、基本形が3拍子と2拍子が複合する八分の五拍子であるが、西ヨーロッパの他の地域ではあまりみられず、バスク地方では頻繁に使われることをアリエールは指摘している (アリエール 1992: 144)。また、彼の意見では、この特性はバスク地方の音楽特有の特徴として不当に受け取られていたが、イバルラギレの《ゲルニカの木》や、バスク生まれで母がスペイン系バスク人だったモーリス・ラヴェル (Maurice Ravel 1875-1937) の弦楽四重奏曲やバレエ『ダフニスとクロエ』でこのリズムが使われ、バスク音楽のシンボルとして使われていると考えられている (アリエール 1992: 182)。
- 33 バスク地方は合唱の盛んな地域で、このような15世紀前半のフォーブルドン (fauxbourdon) のような歌い方と、19世紀機能と声の訓練を音楽学校で学んだような編曲を用いた合唱も存在する。その場合は自然発生的というよりは、編曲を用いた合唱と言うべきである。
- 34 a. の3段目、冒頭の ü (2拍) + khen (3拍) + dü Arra (2拍) の歌い方が録音では印象的。
- 35 1916年3月22日にデーゲンがバスク語の書き取りと音声表記、フランス語訳を作成している。1番の歌詞を筆者が翻訳する。
- | | |
|--|--------------------|
| 1. - lili bat ikhusi dut baratze batean. | 庭園で花をみつけた |
| desiratzén bainuen ene sahexean. | 私のそばに置きたいとおもった |
| loria ez du galtzen udan, ez neguan. | 花は夏も冬も咲いていて |
| haren parerik ez da bertze bat munduan. | そのような花は他に世界のどこにもない |
- 36 プロイセン委員会のリファレンス番号は VII W 0255 Phon Komm 245。演者は Jean-Baptiste Suhas, Antoine Suhas, Joseph Jaureguiber。楽譜の表記は実音。テンポは♩=192。
- 37 「スアシア」のリファレンス番号は 93RFR-15。実音は2度上。テンポは♩=123。
- 38 2016年制作 Elena Canas と Ainara Menoyo による記録映画『Maitia nu zira? (愛する人はどこ?)』
<https://www.mintzoak.eus/fr/enregistrements/programmes/archives-de-la-commission-phonographique-prussienn/enregistrements-de-prisonniers-de-guerre-basques-1916-1917> (2020/08/27 にアクセス)

文献表

日本語文献

- アリエール, ジャック/萩尾生訳 1992『バスク人』東京:白水社。
- コッホ, ラース-クリスティアン/ヴィードマン, アルブレヒト/チーグラー, スザンヌ 2004「ベルリン録音資料館—音響記録の宝庫—」足立整治訳『日本音響学会誌』第60巻7号 東京:科学技術社 386-391
- 徳丸吉彦 1991『民族音楽学』東京:放送大学教育振興会
- 萩尾生/吉田浩美(編著) 2012『現代バスクを知るための50章』東京:明石書店。
- 姫田 大 2018「バスクの野外民衆劇パストラル研究:1988年上演《アゴスティ・シャホ》の分析を中心に」『洗足論叢』46 59-72

欧文献

- Allières, Jacques 1986 *Les Basques* Paris: Presses Universitaires de France.
- Azoulay, Léon 1900 "Sur la constitution d'un musée phonographique" *Bulletins de la Société d'anthropologie de*

Paris, V^eSérie, tome 1, 222-226

Bedaxagar, Jean-Michel 2018 *aitzina pika... Züberoako jauzien, sonüegileen eta dantzarien üngürüan...* Mauléon-Licharre : Sù Azia

Etcheverry-Ainchart, Peio 2013 "Musique, les tempos d'une identité" In P. Etcheverry-Ainchart ; A. Hurel, eds., *Dictionnaire de culture et civilisation basque*, Donostia : Elkar, 144-159

Laborde, Denis 1992 "L'invention d'une tradition Sù Azia et le chant souletin", *Ekaina, revue d'étude basques*. 43 180-189

Sallaberry, Jean Dominique Julien 1870 *Chants populaires du Pays Basque*. Bayonne : Imprimerie de veuve Lamaignère

CD

Musiciens & Chanteurs Traditionnels Kantuketan / Basque Country Radio France. C560202/03.